

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19730273

研究課題名 (和文) 産業集積における協働とイノベーション発生メカニズム

研究課題名 (英文) The cooperation and the innovation process in an industrial district

研究代表者

秋庭 太 (AKIBA FUTOSHI)

日本福祉大学・福祉経営学部・准教授

研究者番号：00340282

研究代表者の専門分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：産業集積, 地域, ネットワーク, 場, イノベーション

1. 研究計画の概要

(1) 研究の目的

地理的近接性をもたらすインフォーマルで頻繁な接触が、自動的に模倣や刷新を生み出し、集積全体でイノベーションを発生させるというモデルはそのイノベーションのメカニズムの詳細については仔細に検討していないため、見方によってはかなり楽観的なモデルといえる。

これまで予備調査によって、産業集積内の企業と、その企業に発注する企業との相互作用において、それぞれの認識に大きな違いがあることが発見事実として認識されつつある。鯖江では通常は生産プロセスに参加しないサプライチェーンの末端の人々が、様々なきっかけで生産プロセスに参加する頻度が大きく、その人々からの要求がイノベーションを連鎖的に発生させる要因になっていると考えられるのである。しかし、なぜそのようなプロセスが生み出したのかといのは明らかになってはいない。

本研究は鯖江のメガネ枠産業のイノベーションメカニズムを産地と市場の関係に着目して明らかにすることが目的である。ここ10年程で、鯖江のメガネ枠産業はその生産のあり方を変化させ頻繁にイノベーションを生み出すような形に進化していると考えられる。そのプロセスを追いながら、産業集積においてイノベーションが連鎖的に生まれるようになる要因を解明することを試みる。

(2) 研究の内容 (研究計画)

①一年目

産業集積内の企業へのヒアリングと発注側の市場関係者へのヒアリングを行う。この

際、組合や行政など一部の機関からの紹介に頼ると取得されたデータにバイアスがかかる可能性があるため、ヒアリング対象は生産工程におけるポジションや生産規模などに多様性を持たせたデータ取得を目指す。市場関係者については同様の留意を行う。また、数多くのヒアリングを行うこととなるため、研究者側の印象バイアスを避けるべく、ヒアリング内容はすべてテキスト化し、客観データとする。

②二年目

これまでの研究結果との整合性を議論し、データの取得をどの程度まで行うかについて再検討する。その上でさらにデータが必要と思われる場合はデータ取得を継続し、さらなる領域密着理論化を目指す。

③三年目

取得されたデータを元に仮説を構築し、定量調査設計をおこなったうえで、パイロットスタディを実施。質問票を修正した上で、定量調査を実施する。

④四年目

得られた定量データをもとに分析を実施し、理論構築と理論の精緻化をおこなう。(継続申請により修正された研究計画へ移行)

2. 研究の進捗状況

予想外に進んだ点と、社会情勢の影響を受けて研究計画を見直さなくてはならなかった点の2点が存在している。

予想外に進んだ点は、業界関係者に研究への理解者が徐々に増えてくることにより、情報

提供者へのアクセス機会が拡大した点である。産業集積などアクターが多く、さらに小規模のオーナー企業は、広報部などのセクションを持っていないため、研究者からの依頼に積極的に協力してくれないことも少なくない。このような場合には紹介者がいることが重要となる。

一方で、研究計画を見直さなくてはならなくなった状況としては、リーマンショックの影響で鯖江地域への発注が一気にストップしたことがあげられる。業界内に将来を憂える雰囲気蔓延することで、大規模な定量調査への協力体制を得られにくいと判断せざるを得なくなった。しかし、それらをきっかけとして業界団体の刷新が進んだことで、新たな研究のチャンスも生まれつつあると判断される。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている (理由)

社会情勢の急激な変化によって研究計画の修正を余儀なくされてしまうことは、社会(地域)を対象とした研究では致し方ないことであるが、現状では残念ながらやや遅れていると評価せざるを得ない。継続的に鯖江地域を研究対象としているが、以前は2004年の鯖江豪雨によって調査を延期せざるを得ない時期も存在した。

単年度の遅れは、複数年度で取り返すプロセス管理と調査地域の分散によって災害や社会情勢の変化に対応していくように努力したい。

また同時に調査関係者との信頼関係の構築が調査のストップを減らすための大きなポイントになると考える。継続的な信頼関係の構築につとめたい。

4. 今後の研究の推進方策

ヒアリングの蓄積から明らかになってきたことは、ローテクの産業集積はイノベーションの視角のみでは評価しきれないということである。また同時に当該産業特有の条件に左右される要因もかなり多く、特定の産業集積に対して政策提言を行うためには、イノベーション以外の変数群を同時に測定・評価する必要があることが議論されている。そのため、他の産業集積研究者と連携しながら、産業集積を測定・評価するための変数群を検討することが次の重要な課題となってくる。

次年度以降の研究計画では定量調査を前提に、産業集積測定のための変数群に焦点を合わせて研究を進めるとともに、バイアスの少ないデータ取得のため、業界団体との協力関係を構築することにエネルギーを注ぐこととしたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

相原基大、秋庭太、「産業集積における技術イノベーションの実現過程 -鯖江眼鏡産地のフィールド調査を通じた予備的考察-」『経済学研究(北海道大学)』58(2), p113-130, 2008年9月
(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/34664>)

平本健太、相原基大、秋庭太「中小企業の製品開発活動と地域ネットワーク -諏訪・岡谷地域と東大阪地域の事例研究-」『経済学研究(北海道大学)』57(4), p105-126, 2008年3月
(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/32398>)

[学会発表] (計1件)

秋庭太「産業集積と市場の関係性~鯖江眼鏡産地産業集積に対する市場からのアプローチ」2009年組織学会研究発表大会. 2009.6.6-7, 東北大学, 2009年6月